

はじめに

この数年、おもに文化や経済の諸問題に関心を寄せてきた私のような人間が、バイオテクノロジーについて本を書く、などというと、あまりに飛躍しすぎるように思われるかもしれない。しかし、この無謀な試みにも、実は筋の通った理由があるのだ。

一九九九年はじめ、私は『ナショナル・インタレスト』誌のオーウェン・ハリーズから、この一年を振り返って、拙論「歴史の終わり」(もともと一九八九年夏に発表)について書いてほしい、と依頼を受けた。「歴史の終わり」で、私が論じたのは、こういうことだった。ヘーゲルは、「歴史は一八〇六年に終わった」と言ったが、これは正しい。一八〇六年、イエナの戦いにナポレオンが勝ったとき、ヘーゲルは自由主義の原理が統合されたのを目のあたりにした。革命の原理を超える政治的進歩は本質的に起こらなかった。一九八九年共産主義の崩壊は、全世界がリベラル民主主義に向けさらに収束するという大団円を知らせたにすぎない。

この拙稿に対する多くの批評を通じて考えさせられたが、唯一反論できないと思ったのは、科学の終わりがない限り、歴史も終わるはずがない、ということだった。それに続く著作『歴史の終わり』と最後の人間』で、進歩主義的世界史のメカニズムを書いた際には、現代の自然科学とそれが生むテク

ノロジの展開が主たる駆動体として現れてくる。いわゆる情報革命のような二〇世紀後半のテクノロジーは、多くがリベラル民主主義の普及に非常に役立った。しかし、我々が立っているのは、「科学の終わり」どころではない。生命科学の進展という途方もない時代のまっただ中にあるのではないだろうか。

現代生物学が当座、我々の政治理解にどのような影響を及ぼすか、私はずっと考えてきた。これは数年の間主宰してきた、国際政治に対する新たな科学の影響を考える勉強会がもとになっている。この問題について、私が当初考えていたことは、いくらか『大崩壊の時代』でも述べている。この本では人間性と規範という問題をテーマとし、民族学、進化生物学、認知神経科学といった分野からの新たな経験的情報によって我々の人間性理解が形成されていることを論じた。ところが、「歴史の終わり」を回顧するという依頼は、もっと体系立てて未来について考え始める機会となった。これは「再考——ボトルの中の最後の人間」というタイトルで、一九九九年『ナショナル・インタレスト』に掲載された。本書は、そこで初めて取り組んだテーマを大幅に拡大したものである。

二〇〇一年九月一日、アメリカ合衆国をテロリストが攻撃したことで、歴史の終わりというテーマについてあらためて疑念が持ちあがった。西洋とイスラムの間の（サミュエル・P・ハンチントンの言葉を使えば）「文明の衝突」を我々は今日撃しているのだ、というのである。しかし私が思うに、アメリカにテロがあったからといって、文明が衝突したことにはならない。この攻撃を仕掛けたイスラム急進主義は自暴自棄的な抵抗をしているにすぎず、そのうち幅広い現代化の波に呑みこまれてしまうだろう。

とはいえ、この事件は、現代世界を生み出したほかならぬ科学とテクノロジーが、文明の大きな弱点となりうる、という事実を明らかにした。飛行機、超高層ビル、生物学実験室——いずれも現代性の象徴である——が悪意ある策略によって、あつというまに武器に変貌する。本書は生物兵器については取り扱わないが、現在さらされている脅威としてのバイオテロリズムの登場は、後述するように、政治が科学とテクノロジーの使用をより強く制御する必要性を示している。

言うまでもなく、本書執筆に関しては、多くの方々の御世話になった。感謝申し上げたい。なかでも、デヴィッド・アーマー、ラリー・アーンハート、スコット・バレット、ピーター・バークヴィッツ、メアリー・キャンノン、ステイヴ・クレモンズ、エリック・コーエン、マーク・コードーヴァー、リチャード・ドアフリンガー、ビル・ドレイク、テリー・イーストランド、ロビン・フォックス、ヒレル・フレイドキン、アンドリュウ・フランクリン、フランコ・ファーガー、ジョンサン・ガラツシ、トニー・ギランド、リチャード・ハッシング、リチャード・ヘイズ、ジョージ・ホームグレン、レオン・カース、ビル・クリストル、ジェイ・レフコヴィッツ、マーク・リラ、マイケル・リンド、マイケル・マグルーア、デイヴィッド・プレントイス、ゲイリー・シュミット、エイブラハム・シユルスキー、グレゴリー・ストック、リチャード・ヴェルクリー、キャロライン・ワグナー、マーク・ウィート、エドワード・O・ウイソン、アダム・ウルフソン、ロバート・ライトの諸氏である。優秀なエージェントのエスター・ニューバーグをはじめ、この数年にわたり私を支援してくださったインターナショナル・クリエイティヴ・マネージメントの皆さんにも心から感謝申し上げます。研究助手のマイク・カーティス、ベン・アレン、クリステイン・ポマレニング、サンジェイ・マールワ、ブライア

ン・グロウには、非常に貴重な助力をいただいた。ブラッドリ基金が、本プロジェクトの一部として
研究生奨学金に支援してくださったことに感謝したい。万能的助手のシンシア・パドックは本書の最
終稿執筆に貢献してくれた。そして妻ローラはいつものように、原稿を読み、強い関心を寄せるいく
つかの問題について、深い見識に立ったコメントをしてくれた。

フランシス・フクヤマ